

Heathcliff 論

——その人生が意味するもの——

服 部 茂

Heathcliff の人生を肯定しようと否定しようと又、彼が人生を通じて施し遂行した「復讐」(revenge) を擁護しようと批判しようとして拘わらず、それが社会一般、日常常識から照らしていかなる人生であろうとも否定することはできない。なぜなら、最終的に人の一生涯を誰れしも、その良し悪しの判断を下すことができないからである。文学における人生論は、その社会が形成する相対的な立場如何により、例えば、その人物が属する階級によっても捉われ方が大きく違って来る。さらに、そこに基づく価値観から思考法、人生過程、又は彼が生きる社会制度の仕組み、法律、倫理、道德感に対しての相違から社会的、個人的の慣習、貧富まで異なる。

文学における人生の考察は、本来生まれながらにして人間が平等、同じものだという前提に、その作中人物が社会 (= 人の集合体) とどう関わり、対処するか追体験することである。

人は生きていくために安定を求める。快樂を求める。人たるものであるがために知を求める。存在の認知を求める。同胞を求める。異性を求める。我々はこういった“生の条件”に絶えず直面する。同時に他者に対して、悪の本能をももち合わせており、生の条件にこれもまた含まれる。

確かに、Heathcliff、彼の人生はその残酷さが強調される。しかしながら、一方で、我々はどこか Heathcliff に魅せられているのも事実である。ならば、彼の敵意に満ちた人生をどう解釈していくか。この小論では、Heathcliff の人生を具体的に追いながら、その彼の人生と作品中に描かれている彼の「復讐」がどんなものであるかを考察したい。

I

Heathcliff の人生は運命と宿命を背負い現実の世界へと導かれていく。彼にとって運命とは Mr Earnshaw に Liverpool で拾われ地主階級の下で暮らすことになる偶然と、次に彼に待ち構えているその境遇からくる周囲からの“tease”される必然である。

この二つの要素が彼にとって大きく影響を及ぼすものは「弱者」としての立場である。「弱者」を端的に説明すれば、その人個人が社会の中において不遇に扱われ、すがりながら生きなければならない人をいう。従って、ここで意味する「弱者」とは、Heathcliff の生活を限定し、生き方そのものの決定過程において彼を縛り操る心理的動作及び社会的身分においてということにする。強者、弱者を言及するとき、それは社会制度と密接に関連している。というのも、その社会制度がその社会で生きる人々の価値感を大方決定し、common sense を形成し、前者、後者と判断するからである。

Nelly は Mr Earnshaw が Heathcliff を Wuthering Heights に連れて帰った来たる経緯を次のように説明する。

... all that I (=Nelly) could make out,...

was a tale of his (=Mr Earnshaw) seeing it (=Heathcliff) starving, and houseless, and as good as dumb in the streets of

Liverpool where he picked it up and inquired for its owner—
Not a soul knew to whom it belonged, he said, and his money
and time, being both limited, he thought it better to take it
home with him, at once, than run into vain expenses there;
because he was determined he would not leave it as he found it.

(IV)

この記述から以下のことが提示される。Heathcliff が孤児であり、
生命の危機にさらされていることと、そのとき Mr Earnshaw には
“money” と “time” が無い偶然性と、彼を拾わざるを得ない境遇で
ある。つまり、先に述べた運命と宿命である。こういった状況から
次への状況へと繋がる。Nelly は語る。

... the young master (= Hindley) had learnt to regard his father
as an oppressor rather than a friend, and Heathcliff as a usurper
of his parent's affections, and his privileges, and he grew bitter
with brooding over these injuries.

(IV)

安住に暮らしていた Hindley からすれば Heathcliff は突然なる侵
入者でしかなく、略奪者である。この現実から、Hindley による
“tease” から “ill-treatment” へとその度合いを増したのは必然であ
る。しかし、Heathcliff の名が示すよう荒れ地に咲く Heath の花の
ように、この状況を把握し、したたかに利用し強く生きる彼の姿が
ある。彼は自ら「弱者」と認識していたことであろう。

再び運命 = 偶然と宿命 = 必然とが Heathcliff の人生の方向性を
決定する。Mr Earnshaw が健全であり、Hindley が家をあげ
Earnshaw 家の一員として生活をし、教育を受けながら過ごす 3 年
間の偶然、Hindley が Mr Earnshaw の死後 Wuthering Heights
を継ぐことになる必然がある。その結果として「弱者」としての立
場が一層固定され、故に Hindley は次のように Heathcliff を扱う。

He (= Hindley) drove him (= Heathcliff) from their company to the servants, deprived him of the instructions of the curate, and insisted that he should labour out of doors instead, compelling him to do so, as hard as any other lad on the farm. (VI)

この Hindley の命令には Heathcliff は当然、必然的に「こうあるべきだ」と、つまり弱者としての運命を引き受け弱者は弱者らしく生きるのが本当であるということを示す。

運命と宿命が合わさりその和として「弱者」という値がでたのではあるが、Heathcliff の場合、そうした不利な状況を彼の「意志」の力で偶然、必然の形から自らの「選択」へと変える。Hindley が屋敷の主人となった時点で、Heathcliff は Wuthering Heights を出るという選択の余地があったもののそこに留まることを決意し、以後 Hindley からの “ill-treatment” に耐えることになる。このことから運命として背負う「弱者」の立場を甘受せざるを得なく、独立して暮らしていけず、生活維持の代償として、Hindley から “ill-treatment” に耐えなければならない。己の立場の衰れさと、一方無条件で地主階級の座にあってさき主人として、生活の不安なく暮らす Hindley を憎む。そして、Hindley を憎むことはそうさせた社会の仕組みを表す社会制度をも憎むことになる。Heathcliff は Nelly との会話の中で次のようなやり取りを交わす。

‘I (= Heathcliff) ’m trying to settle how I shall pay Hindley back. I don’t care how long I wait, if I can only do it, at last. I hope he will not die before I do!’ ‘For shame, Heathcliff!’ said I (= Nelly). ‘It is for God to punish wicked people; we should learn to forgive. ‘No, God won’t have the satisfaction that I shall,’ he returned. ‘I only wish I knew the best way! Let me alone, and I’ll plan it out; while I’m thinking of that, I don’t feel pain.’ (VII)

もはや、神という運命には頼わず、意志を強くもつ Heathcliff がいる。つまり、運命→宿命という図式を打ち消し、自ら意志に基づいた考え方に改め自ら行動を起こして、変えていかなければならないと悟る。この生きる意志力こそ Heathcliff にとっての人生の “revolution” である。

II

Hindley の専制の下での生活を余儀なくされた Heathcliff は家族の地位から召使いへと追いやられたが、その中で生きることを選択した。そうした環境の中で彼の生活をみると、そこには主人 Hindley の指示にほぼ忠実に従う Heathcliff の姿がある。ややもすると、見過ごしてしまいがちである。そうさせたのも、彼が置かれた状況を適確に自分自身の言葉でもって表現し、訴える力がなかったのではないかと考えられる。言葉は意志力形成の上で大切でありその行動を決定する上で大きな役割を果たす。Heathcliff は肉体的のみならず精神的、思考的にも支配され、動物並みの生活とはこういったことを意味するのではなかろうか。そこで、この章では、教育を与えられなかったことが、Heathcliff の人生にどう影響を及ぼしたのか考えてみる。

Wuthering Heights では、Edgar Linton に象徴されるよう教養、知性が重要視されている。召使いの Nelly でさえもある程度の教養はもっていると Lockwood に語っている。Hindley から教育を受けることを奪われた不利益は、Heathcliff にとって人間関係を円滑にする上で大きな影響を及ぼし、とりわけ Catherine との関係をも大きく左右したのである。教育は人間を人にし、判断力を身につけ、identity を確立する。Heathcliff がもの言わぬ労働者として野良仕

事に従事できたのは、教養、知性をもちあわせていなかったのが原因であると考えられる。16歳になる Heathcliff を Nelly は次のように回想する。

... without having bad features or being deficient in intellect, he (=Heathcliff) contrived to convey an impression of inward and outward repulsiveness that his present aspect retains no traces of.

... he had, by that time, lost the benefit of his early education: continual hard work, begun soon and concluded late, had extinguished any curiosity he once possessed in pursuit of knowledge, and any love for books or learning. (VIII)

教育を受けないことによって自我形成が阻止されていることは自明である。この影響は彼自身の identity の確立を遅らせ、生きる力と人としての誇りを奪い、知的好奇心をも消滅させてしまっている。本能を優先させ正しい思考に結びつく理性をも歪めてしまっている。Heathcliff は墮落してしまっているが、同じ墮落でも Hindley のそれとは異にする。すなわち、前者は未来に、後者は過去にと。Catherine は Heathcliff にこう詰め寄る。

... 'What good do I (=Catherine) get—what do you (=Heathcliff) talk about? You might be dumb or a baby for anything you say to amuse me, or for anything you do either!' 'You never told me before that I talked too little, or that you disliked my company Cathy!' exclaimed Heathcliff, in much agitation.

'It's no company at all, when people know nothing and say nothing; she muttered. (VIII)

Heathcliff は Catherine から激しく侮辱を受ける。つまり、彼の教育レベルは Catherine からみると、“dumb”であり“baby”である。

勿論この比較における対象は Edgar である。Catherine は Edgar と交際することで教養や知性といった「知」に魅了される。いま挙げた Catherine の引用文は、換言すれば Edgar への賞賛とも受けとれる。相手と円滑かつ快適な会話ができる “communication skill” は教養や知性がその土台となる。“exclaimed Heathcliff, in much agitation” は同時に、Heathcliff 彼自身に向けられた苛立ちでもある。この Heathcliff の叫びを憎悪に変えた決定的なことは Catherine が Nelly に Edgar との結婚についての相談内容 (IX) であることは周知の通りであるが、それは Catherine が知識人で文化人の Edgar に好意を寄せたのである。Heathcliff と Edgar の二人の間の相違は歴然であり、そのことについて Nelly はこう語る。

Doubtless Catherine marked the difference between her friends as one (=Edgar) came in, and the other (=Heathcliff) went out. The contrast resembled what you see in exchanging a bleak, hilly, coal country for a beautiful fertile valley; and his voice and greeting were as opposite as his aspect—He (=Edgar) had a sweet, low manner of speaking ... (VIII)

Heathcliff とは逆に、この Edgar の姿を形成したのは、まぎれもなく彼の置かれた洗練された境遇である。教育も十分に受け、不自由もなく生活を送り、生きる恐怖、将来への不安など無縁の立場である。ここにも、運命 (=偶然)、宿命 (=必然) が見え隠れする。この Edgar の境遇は社会的強者の象徴の役割を果たす。

人は愛され、存在の認知を受け育っていく。Heathcliff にとってその代理をしてくれる人物が他ならぬ Catherine であった。唯一自分を無条件に受け入れてくれた彼女が冷酷にも彼を見捨てる。Heathcliff は、Edgar 自身ではなく彼の所有する「知」に敗れたのだと確信する。つまり、その知の背後にあるものは、Heathcliff が

過ごし、扱われてきた人生の過程に敵意を転化し、その補償として、今までの己を取り戻さなければならなかったのである。

III

Heathcliff の「復讐」の根源にあるのは少年時代生産的に生きることを阻まれ、他人からも決して認知されず、よって自尊心さえも形成されないまま過ごした彼の境遇に対しての対外的な敵対心にある。S. Maugham の言葉が想起される。

I knew that suffering did not ennoble; it degraded. It made men selfish mean, petty, and suspicious. It absorbed them less than men;¹

常に弱者として生きることを余儀なくされ、その対抗手段をも用い得ずひたすら現状にだけ甘受しなければならない。Heathcliff の心中には生きていけるか否かの不安、恐怖が同居していたはずである。同時に、無意識のうちにも「己の今の様」は己に帰するのではなく周囲を取り巻く環境に帰するのだ、といった彼が根本的に許すことができない怒りがあり、より強固に憎悪を形成していくのである。少年期において経験しなければならない「発達課題」といったプロセスをも通過することもなく、自分のいまの現状を押し殺すかのごとく抑圧し、過酷な労働と単純で退屈な毎日の暮らしがあるだけである。以下、E. Fromm の研究を参考に Heathcliff の motive を探り、彼のライフワークというべき “revenge” を考えてみる。

Heathcliff について次のように評される。

There is nothing to admire in Heathcliff's murderousness, egoism, sadism and evil, as a figure in 'real' relationships.

... Heathcliff is petty in his search for revenge, meanly cruel, and a sordid offender against human rights. He is utterly inauthentic in the way he marries Isabella only to spite her and her brother, in his intrusion into the Linton marriage and in his ill-treatment of young Catherine and even Nelly Dean. Heathcliff is a horrible man;²

彼の行為にはその特徴のひとつとして violence があげられる。上記の引用もそれを物語っているが、E.Fromm はそのことに関して、

Destructiveness appears in two forms: spontaneous, and bound in the character structure. By the former I refer to the outburst of dormant (not necessarily repressed) destructive impulses that are activated by extraordinary circumstances, in contrast to the permanent, although not always expressed, presence of destructive traits in the character.³

と述べ続いて、

... these destructive explosions are not spontaneous in the sense that they break out without any reason. In the first place, there are always external conditions that stimulate them, such as wars, religious or political conflicts, poverty, extreme boredom and insignificance of the individual. Secondly, there are subjective reasons ...

It is not human nature that makes a sudden appearance, but the destructive potential that is fostered by certain permanent conditions and mobilized by sudden traumatic events.⁴

と分析している。Heathcliff が復讐を行う直接の原因になったのは彼が恋心をもち親和関係にあった Catherine が Edgar を選んだことにある。恋も一種の独占の欲求である。恋は相手を支配し縛りつけたいという欲求である。恋におけるこの束縛は決して不快なもの

ではなく、その束縛こそ二人の絆そのものといえる。Heathcliff が Catherine と一緒に過ごした日をカレンダーに記す場面や、Catherine の行動を気にし、心配することも相手を欲したい恋の現われを示す場面である。恋についても一言補足しておく、恋に対して、愛はその束縛から解放する行為であり、前者は常に疑念に基づいているが、後者は信頼に基づいている。

Heathcliff は Catherine に裏切られ、無言のうちに耐え、人生の不条理を痛感する。Heathcliff の「復讐」が激しいのは環境、立場が自分の生命と引き換えられ、それに不随する社会制度、そして彼を取り巻く人物たちに対して憎悪を形成し増殖させていったからである。F. Bacon は「復讐を考えている人は自分の傷をいつまでもなまなましいものにしている」⁵ と述べる。

相手を肉体的にも精神的にも完全に支配し、独占することは、この上なく快楽でありその支配は一人の人間のみならず世界中をも手中にし、絶対的な独裁者となり、一人たりとも裏切は許されない。彼に盾をつく者は即刻死刑台へと向かわせられる。Heathcliff の violence にあるのはそういった sadism 性であり、E. Fromm の研究からいえばその行為のプロセスは特殊なものではなく典型的とさえいえるのではなからうか。E. Fromm は次のように sadism を分析する。

... the core of sadism, common to all its manifestations, is *the passion to have absolute and unrestricted control over a living being*, whether an animal, a child, a man, or a woman. To force someone to endure pain or humiliation without being able to defend himself is one of the manifestations of absolute control, ... most sadism is malevolent, Complete control over another human being means crippling him, choking him thwarting him.⁶

と考察し、

One of the most widespread manifestations of nonsexual sadism is the abuse of children.

... the abuse of children ranges from inflicting death by severe beating or intentional starvation to inflicting swellings and other nonfatal wounds.

... Sadism is most intense when the child is still helpless, but is beginning to have a will of its own and to react against the adult's wish to control him completely.⁷

と分析を施している。この sadism 性が顕著なのは Isabella と Hareton である。しかしその性質は異なる。つまり Isabella は暴力で虐待し、Hareton には無教養に養育する。Isabella は Nelly へ送った手紙の中で、

Is Mr Heathcliff a man? If so, is he mad? And if not, is he a devil? ...I assure you (=Nelly), a tiger or a venomous serpent could not rouse terror in me equal to that which he wakens.

(XIII)

と結んでおり、Heathcliff の暴力行為を “his habitual conduct” と日常的であると告白する。又、Hareton についての扱いも Nelly は、

Mr Heathcliff, I (=Nelly) believe, had not treated him (=Hareton) physically ill; thanks to his fearless nature, ...

(XVIII)

と述べている。つまり、Heathcliff は相手が暴力により苦しまなければそれ以外の虐待を試みる。以下に Heathcliff の「復讐」をまとめる。

Heathcliff が施した「復讐」の構図

対 象	主 な 行 い	具体的手段	結 果
Hindley	博打で負かし、財産を抵当に入 れさせ屋敷ごと奪う	Hindley の 墮落を利用	Wuthering Heights を乗っ取 る
Isabella	結婚をし虐待する	暴 力	Thrushcross Grange 及び Linton 家の財産を手中にす る足掛かりをつくる
Edgar	妹(Isabella)が Heathcliff と娘 (Catherine)が Linton と結婚す ることによって精神的に苦しめ る	Heathcliff を取り巻く 人物すべて を利用	死を促進させる
Hareton	教育を与えず徹底的に無教養 に養育する	放 任	Heathcliff の下部となる
Linton	脅迫をし Catherine (Edgar の 娘) と強制的に結婚させ利用する	強 迫	Thrushcross Grange を手中 にする権利を得る
娘の Catherine	息子の Linton と計画的に結婚 させる。	強 迫 監 禁	Edgar を精神的苦痛を与えると 同時に、Thrushcross Grange 及び Linton 家の財産を手中に する。

Heathcliff は彼自身の「復讐」の概念についてこう語る。

The tyrant grinds down his slaves—and they don't turn against
him, they crush those beneath them. (XI)

Heathcliff は Isabella、Linton、Harton、娘の Catherine に Heath-
cliff がいう tyrant となり、かつて弱者であったその恨みを晴すべ
く彼らに虐待をはたらくのである。

IV

この章では Heathcliff の「復讐」が意味することを考察し、この
小論のまとめとする。

Heathcliff の復讐は、あくまで個人的なものではあるが、復讐行

為には多かれ少なかれ、E. Fromm の指摘のように、その背後（ここでは社会的要因）が存在する。復讐とは己の傷ついた自尊心の感情をそのまま相手に何らかの手段を用いて仕返すことをいう。Heathcliff の場合、Catherine が彼を裏切ったことであり、その矛先が Catherine 自身ではなく、社会的な強者である Edgar の方に向けられる。その目的が Catherine を奪い返すことではなく、Linton 家の財産と不動産を奪い乗っ取ることにある。そこに社会的な復讐が結果として付随する。

では、Heathcliff の復讐が意味するものは何か。それは不安と恐怖に脅えながら弱者として強者（＝権力者）によって圧制させられてきた弱者の挑戦である。結果的には、それは社会制度といった社会をも巻き込んで展開していく。Heathcliff は次のように述べる。

... my son is prospective owner of your place, and I should not wish him to die till I was certain of being his successor. Besides, he's *mine* and I want the triumph of seeing *my* descendant fairly lord of their estates; my child hiring their children, to till their fathers' lands for wages ... (XX)

つまり、自分のもの（支配下にある息子）が自分がかつて置かれていた同じ地位に強者たちを落とし入れ、立場を逆転することで復讐となす。

Heathcliff は幼児期より不幸の中に存在し、自分の姿と直面しなければならなかった。豊かな愛情を注がれず、無条件に自分の存在を受け入れてくれる両親もいない。彼は、少年期に憎悪を形成し、さらに裏切りを経験し、失望の傷痕を背負い自ら墮落し、他者と建設的な関係を結べない。娘の Catherine は悪意に満ちた Heathcliff の人生を推測し、皮肉をもって同情する。

Mr Heathcliff, *you* have *nobody* to love you; and, however miserable you make us, we shall still have the revenge of thinking that your cruelty arises from your greater misery! You *are* miserable, are you not? Lonely, like the devil, and envious like him? *Nobody* loves you—*nobody* will cry for you, when you die! I wouldn't be you!' (XXIX)

Heathcliff は、この Catherine のセリフをあまりにも凶星のために否定しない。

この章の冒頭でも述べたように、Heathcliff の復讐の意味するものはあくまでも個人的なものではあるが、社会的な意味をももつものである。F. Bacon は「復讐するにあたっては人は敵と対等であるのにすぎず」⁸ と述べているが、Heathcliff の場合には対等になるには3年の歳月を要したが、それは弱者から脱出であり人生の “re-birth” といえよう。3年後、Wuthering Heights に姿を現わした Heathcliff のことを Nelly は次のように生々しく説明する。

He (=Heathcliff) had grown a tall, athletic, well-formed man, beside whom, my master (=Edgar) seemed quite slender and youth-like. ... His countenance was much older in expression and decision of feature than Mr Linton's; it looked intelligent, and retained no marks of former degradation. ... his manner was even dignified, quite divested of roughness though too stern for grace. (X)

と、その変貌振りを驚嘆する。Heathcliff のことを幼い頃から知っている Nelly だけに彼女の言葉には reality を感じさせられる。Nelly に言わせれば少なくとも Edgar と対等、否やそれ以上の人物になって帰ってきており、“Mr Heathcliff” といわしめている。このことに関して、特筆すべきことは彼の雄弁さである。そのことは、

娘の Catherine との場面において顕著であり、その口調には論理に支えられた説得力がある。その結果、彼の意のまま彼女を誘導することに発揮される。T. Eagleton は Heathcliff の “rebirth” について次のように言及している。

... Heathcliff acquires culture as a weapon. He amasses a certain amount of cultural capital in his two year's absence in order to shackle others more effectively, buying up the expensive commodity of gentility in order punitively to re-enter the society from which he was punitively expelled.⁹

Heathcliff は、まとまった知識、教養を授かることもなく、又こういった教育の重要性を誰かが説いて彼に与えることもなかった。Hindley によって、教育を完全に奪われた故に生きる力、前向きな自己形成、適切な人間関係、知識を求める意欲さえ消滅したばかりか、その結果社会からも除外される。T. Eagleton の引用は、知識を得ることは、世間に入っていく必要な資格であると強調する。こうして、社会へと復帰した Heathcliff は生まれ変わり、そして堂々と生きていく。

Heathcliff が Wuthering Heights に戻ってきた以来、彼の人生は彼が暮らした Earnshaw 家、Catherine が嫁に入った Linton 家の両家を支配し、手中にするための人生である。Heathcliff を取り巻く人物、Isabella、Linton、Hareton、娘の Catherine との関係は Heathcliff が復讐を遂行する上での関係でしかなく、そこに共通することは、徹底的な無関心と、無責任な放任のみである。A. Kettle は Heathcliff の復讐の戦略として次のように述べる。

... Heathcliff's revenge may involve a pathological condition of hatred, but it is not at bottom merely reurotic. It has a moral force. For what Heathcliff does is to use against his enemies

with complete ruthlessness their own weapons, to turn on them (stripped of their romantic veils) their own standards, to beat them at their own game. The weapons he uses against the Earnshaws and Lintons are their own weapons of money and arranged marriages. He gets power over them by the classic methods of the ruling class, expropriation and property deals.¹⁰

Heathcliff の復讐とは、弱者として生きなければならず、本来家庭とは、子を人として育て、独立させ、社会に還元すべきものであるが、Heathcliff の場合そういった根本的な進路を断たれた。この経験が彼に、個人引いては社会に対する怨念となって、その後の人生を決定してしまった。彼の復讐は violence の故に sadism 性が伴い、一層我々に激しさを感じさせる。Heathcliff は Earnshaw 家や Linton 家といった両家が象徴する既に出来上がった既成の組織 (= 社会制度) を自らが解体することで快楽を覚えていたので、そこに Sadism 性が強く現われる。E. Fromm は次のように述べる。

Vengeful destructiveness is a spontaneous reaction to intense and unjustified suffering inflicted upon a person or the members of the group with whom he is identified.¹¹

続いて、

It (= Vengeful destructiveness) is of much greater intensity, and is often cruel, lustful, and insatiable. Language itself expresses this particular quality of vengeance in the term "thirst for vengeance."¹²

と復讐的破壊性を分析している。

以上、考察してきたように、Heathcliff の復讐の動機の根底にあるのは、彼が過ごしてきた少年期にその根拠を求めることができよう。そうした彼自身の境遇の経験から、人生を費いやしての「復讐」

を誓い、自己実現を試みようとしたのである。従って、Heathcliffの人生における意志決定は、復讐そのものの遂行が前提になる。E. Fromm は次のように述べる。

A society based on exploitative control also exhibits other predictable features. It tends to weaken the independence, integrity, critical thinking, and productivity of those submitted to it. This does not mean that it does not feed them with all sorts of amusements and stimulations, but only those that restrict the development of personality rather than further it.¹³

抑圧され、弱者としてしか生きざるを得ない人物がその過程で憎悪を形成し、裏切りによりそれが触発され、彼の人生を方向づけ決定した。この、Heathcliffの復讐は両家に対しての強者への復讐であり、ある種クーデター的なものである。故にあくまでも個人が、個人に対しての復讐ではあるが、社会的な要素を帯びることになる。Heathcliffの「悪」¹⁴の提示は嫉妬、裏切り、失望、暴力、幼児虐待である。文学において描写される「復讐」行為の例として、このような復讐行為が *Wuthering Heights* の作品において、示唆していることは、Heathcliffの復讐は確かな「概念」(concept)と「理論」(theory)を必要とするということである。

注

作品からの引用は全て Penguin Book 版に依る。

Emily Brontë, *Wuthering Heights*, ed. David Daiches (Penguin Books, Harmondsworth, 1985) テキストにおけるその該当する章に関しては、引用文に続く括弧内のローマ数字でそれを示した。

1 W. Somerset Maugham, *The summing up*, (Penguin Books, Harmondsworth, 1963), 45.

2 David Holbrook, *Wuthering Heights ... A Dram of being*,

- (Sheffield Academic Press, England, 1997) 54.
- 3 Erich Fromm, *The Anatomy of Human Destructiveness* (Holt Rinehart and Winston, Canada, 1973) 270.
 - 4 Fromm 271.
 - 5 フランシス・ベーコン、成田成寿訳、「随筆集」福原麟太郎編『世界の名著ベーコン』(中央公論社、東京、1992), 75.
 - 6 Fromm 284.
 - 7 Fromm 284.
 - 8 ベーコン 74.
 - 9 Terry Eagleton, *Myths of Power—A Marxist study of the Brontë* (Macmillan Press, London, 1988), 104.
 - 10 Arnold Kettle, *An introduction to the English Novel* (Hutchinson, London, 1961) 149–150.
 - 11 Fromm 271.
 - 12 Fromm 271–272.
 - 13 Fromm 297.
 - 14 John Sutherland, *Is Heathcliff a murderer?—Great Puzzles in Nineteen-Century Literature* (Oxford University Press, England, 1996) [川口喬一訳『ヒースクリフは殺人犯か?—19世紀小説34の謎—』、みすず書房、東京、1998]において、HeathcliffはHindleyを故意に死に至らしめた殺人犯ではないかと検証している。この考察から、同じことが息子Lintonについてもいえる。Heathcliffは“his (= Linton) life is not worth a farthing, and I won't spend a farthing on him (= Linton). ... and let me never hear a word more about him! None here care what becomes of him;” (XXX) と述べ何も介護せず、Lintonを死亡させている。

参考文献

- 1 ベーコン、フランシス 成田成寿訳、「随筆集」福原麟太郎編『世界の名著ベーコン』中央公論社、1992.
- 2 Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. Harmondsworth: Penguin

Books, 1985.

- 3 Eagleton, Terry. *Myths of Power —A Marxist study of the Brontës*. London: Macmillian Press, 1988.
- 4 Fromm, Erich. *The Anatomy of Human Destructiveness*. Canada: Holt Rinehart and Winston, 1973.
- 5 Holbrook, David. *Wuthering Heights ... A Drama of being*. England: Sheffield Academic Press, 1997.
- 6 Kettle, arnold. *An introduction to the English Novel*. London: Hutchinson, 1961.
- 7 Maugham, Somerset W. *The summing up*. Harmondsworth: Penguin Books, 1963.
- 8 Sutherland, John. *Is Heathcliff a murderer? —Great Puzzles in Nineteen—Century Literature*. England: Oxford University Press, 1996.

(本稿のⅢは、1997年10月11日の日本英文学会中部支部第49大会における口頭発表の内容を大幅に加筆し、修正を加えたものである。)